

くことが出来ホットする天津では集団生活をする事となり、武徳殿にはいる。大きなプールがありその中に冬期保存食として色々の食物が山積されており皆飛び上からんばかり喜んだのも束の間、米軍が民間の中国人に分けあたえてしまった。数日して日本軍兵器廠に移り十二月十一日米軍上陸用舟艇にて天津より乗船、船内で米兵より女性を十人要求され一同がく然としているとき水商売の女性の方達が「私達が行きます」との申し出があったときに皆泣いて手をあわせたのが忘れられません。船中無事に故郷福岡町につきましたが、昭和二十一年十二月四日医者が無責任から妻は不帰の人となり早や四十数年が立ってしまいました。

満州の思い出

沖繩県 兼城 千代

私は時折り考える。戦争とは何であったか、誰のため、なんのため、若かりし時代を振りかえり、時々思い起こ

すことがある。一老人ながら、ときは十八年五月花の十九歳、軍人姿の主人に手をひかれ大陸に渡った。たどり着いたのが、満州開拓地、現地へ行って農業をするのでなく主人は兵事主任、若い団員に軍事訓練の担当者。軍服姿に日本刀、他の団員から羨まれていた。が、時勢は変わりこの生活も二年半で終わった。

主人は二十年の六月頃、二度目の召集を受け、親子三人を異国の地に残して出て行った。頼りの大黒柱がいない。秋風は去り極寒が押し寄せる大陸の冬を迎えた。男全員が戦地に行った。あとは婦人と子供ばかり、その姿はこの世の不自然さが日を増してゆくばかり、そのうちに予想していたとおり、現住民の男が出没始めた。皆と連絡をとり合い昼夜集団で行動する。服装も男姿、黒髪は切り落とし顔にスミを塗り、身を守る生活は苦難の中の苦難でした。配給物資の受け取り、伊漢通港から穀物の運搬は体力の限界だった。特に心配は薪取り作業、極寒の中で山へ行く四、五人組んで枯枝を探し束ねて、めいめいが肩にかつぎ、グループで帰って来る。これが日課であった。ある日のこと、いつものように午後四時

頃帰って来て驚いた、高熱で勝美が倒れていた。ハシカだった。くるしまぎれに窓に寄りかかりお母さんの帰りを待っていたらしくガラスには小さな手のあとが白く水ついていた。なんとあわれ三日後には息をひきとった。こうしたことが、各家々におこっている。果してこのような幼な児が、何十人出たであろう爪と髪を切り、沖繩に持ち帰った。暫くして、難民はハルビンへ移動した。ハルビンの花園収容所はごったがえしていたが、この中に赤痢が蔓延し、次から次へと倒れた。その人達はかくれ部屋に運び込まれたが、元気で戻った者は一人もなかった。親無し児も多数出た。ゆえに致し方なく中国婦人に預けられた。これが日本人残留孤児達である。地獄の中の地獄。人間の心は一カケラもなく、どんな不幸が発生してもマヒした人間は誰一人涙する者はいなかった。

その中に長男の健一郎が亡くなった。同じく爪と髪を切り二人の遺品として持ち帰った幾日が過ぎ古里沖繩にたどり着いたときは、世はまさに変わっていた。その翌年には主人もシベリヤからヤセこけて帰還した。お互い

地獄を渡り終えた。

愈々本当の二人の世界がはじまったのです。子供も四人出来、今はめいめいが世帯を持って幸せに暮らしている。しかしままにならぬのが人の世の常、六年まえに主人も帰らぬ人となった。一人とり残され私、どう生きて行けば良いやら今は主人の位牌と子供二人の魂の入った位牌を前に、時の流れにそって生きて居る老人である。

国策で渡満、開拓したが

高知県 山本 義雄

政府は、国策として、食糧増産その他の目的をもって、満州開拓を農民達に奨励していた。その頃、円行寺の住民を主体として、初月郷開拓団をつくり、錦州市女兒河区に入植することになった。その頃、私の家族は、妻と幼児一人と年とった両親の五人家族でしたが、満州の生活が安定したら両親を呼び寄せるつもりで、まず夫婦と子どもと三人で渡満しました。しかも入植後まもなく敗